

いつもより重たい雪に覆われていた遺跡の森から、まぶしい春の光が届くようになり、今年もこうして門出の春を迎えることができました。

第37回の卒業証書授与式で本校を巣立つ皆さんは、中学1年生の5月に、長かったコロナ禍の活動制限が解除となり、3年間、授業や行事のほとんどを制限なく経験することができました。義務教育の9年間、喜びや悲しみを分かち合いながら、その育ちに寄り添ってこられた保護者の皆様、そして地域の皆様のご臨席を賜り、今日の晴れの日をここで共にお祝いできる幸せをかみしめています。

―「優しさは強さ」。3年生の皆さんと過ごした今日の日まで、いつも伝えてきた言葉です。誰の心の中にも優しさはある、私はそう思っています。人によって、場面によって、発揮される優しさのかたちは違っていて、解釈の幅がとても広い言葉です。優しさとは、人とどのように絆を結んでいくのか、また、自分はどのような人であるのかを、自らに問い続けていく、指針のようなものです。卒業式までの準備があわただしく過ぎていく中で、3年生のみなさんが、優しさは強さという言葉覚えてくれていると感じ、とても嬉しく思っています。

今から3年前、あやめ野中学校校長の異動が決まった時、どんな学校にしたいかと尋ねられたことがあります。私はすぐに、優しい学校にしたいと答えました。すると、ひとつの学校を担うというのはそんな甘いものではないとの言葉をいただきました。「優しい」という言葉が、ぼんやりとした、危機感のない言葉に聞こえたのかもしれませんが。この時のやりとりのことは、時々思い出すことができました。あれから3年、「優しい学校」にしたいという思いは少しも変わっていません。優しさとは、甘さでも、曖昧さでもなく、また、強さとは、力や、制圧する言葉の力でもありません。本校のすべての子どもたちに、人を思い、人とつながり、夢を実現するためになくてはならない力を付けてほしい、それが私の願う成長の姿です。

「10歳の壁」という言葉をご存じでしょうか。学習の難しさや、人間関係の複雑さへの意識が高まり、つまづきや悩みがふえる小学校4年生の成長過程に感じがちな壁を総称した言葉です。3年生の皆さんは、小3の2月から、まさにこの10歳の壁の時期に、マスク着用、オンライン授業、黙食、ソーシャルディスタンスの確保、という学校生活が続きました。

「学校休校宣言」を聞いたときのショックから数日経った頃から、私は、この、距離を置いたり声を出さないで活動したりする、関われない環境の影響を気にするようになりました。関わりながら学び合うのが学校ですから、その不安はまだ少し、私の心の中で続いています。テストの成績や作品、計測した結果などは、自分ひとりの努力で成果を確認することができます。一方、コミュニケーション力や想像力、解決する力などは、関わる経験を通してゆっくり身に付けるものです。コロナ禍という災害経験を通して、私は、誰かが守ってくれるはずだという根拠のない考えを切り替え、安全は自ら守っていくのだと、はっきりと自覚しました。3年生のみなさんも、卒業後に、まだまだたくさん、人と関わる経験を、意図的につくっていくことを意識してほしいと思います。人との絆は喜びを倍にし、悲しみは半分にしてくれます。

これからは、より一層、多様性を認め合い、人と共生して生きる力が求められる時代です。人に優しくできる人は、自分の心に、優しさという橋を架け、人や世界とつながっていくことができます。あのころ、思う存分できなかつた経験であっても、意識すれば、これからも積極的に人とかかわる機会をつくり、確実に積み重ねていくことができます。

自分と未来は変えることができるのです。

保護者の皆様、予測できない未来を生きていく子どもたちが、悩みながらもあきらめず、人とつながりながら成長していく中で、これからも大きな愛でお支えくださるようお願いいたします。

最後に、人生という旅路はこれからも続いていきます。あなたたちのふるさと「あやめ野」です。優しさという翼で、逞しく羽ばたいていくことを願い、本校「第三十七回卒業証書授与式」の式辞いたします。